

## 報告 I

### シュエダゴン・パゴダ東門地区のダマヨンドーギー（大説法堂）地鎮祭

日本ミャンマー友好協会  
池田正隆

**岡本：** それでは、第2部の報告を開始したいと思います。第2部のテーマは「ミャンマーの仏教」でございます。最初は池田正隆先生にご報告をお願いいたしたいと思いますが、その前に少しだけご略歴を紹介させていただきます。

池田先生は大谷大学の文学部仏教学科をご卒業後、ビルマ政府仏教会招請の留学僧としてビルマにお渡りになりました。そして、出家・授戒し、比丘になっておられます。3年間、南方上座部における僧院生活を過ごされて後、帰国なさいます。帰国後は、大谷大学、大阪外国語大学、京都光華女子短期大学、天理大学などで講師として、教育研究活動が続けられる一方、社団法人日本ミャンマー友好協会にて会長代行、また相談役として協会を支えてこられました。その他、研究業績も数多あり、全てをご紹介できません。しかし、その一部は皆様のお手元の主要業績（本書87頁参照）にて紹介させていただいております。お時間もございますので、早速ご報告に入りたいと思います。

「シュエダゴン・パゴダ東門地区のダマヨンドーギー（大説法堂）地鎮祭」について、ご報告をよろしくお願いいたします。

**池田：** 留学僧として3年間ビルマに滞在させていただきまして、勉強をそこでさせていただいたことが私の一生を決めるような出来事で、今日に至っております。元々、高校の教員を定年まで務めていた者でございます。その間、やはりビルマの人達の捧げてくださる食事をいただいて、3年間過ごさせていただいたということ、これは私にはどうしても逃れられない運命と言いますか、宿命であったということです。本来なら私は寺の長男であったので、北海道の真宗大谷派の末寺の住職をしなければならない使命を生まれた時から持っていたわけでございますけれども、ミャンマーに行きまして、ビルマの人達のお米をいただいた。お寺で育ったということが土台となり、そのために私の命があるということでございますから、私がビルマから帰ってきても、生涯、やはり機会があれば坊さんになって過ごしたいなという思いは持って参りました。一応、東本願寺から僧籍はいただいておりますけれども、職業として僧侶の生活をすることはありませんでした。

実は父親が病気になりまして、しばらく住職をさせていただいたのですけれども、それは京都にいて、教員をやりながらのことでございまして、弟がいたり、周りの人達の

助けがあつて住職もやれたということで、本当にあらゆることにおいてブツダの教えに守られて生きてきたなというふうに思っております。

それにしても、自分は至らぬ者で、間違いばかり繰り返しておりますけれども、出来るだけ自分の使命の一端を果したいなというふうに思っている者でございます。

本日は「シュエダゴン・パゴダ東門地区のダマヨンドーギー（大説法堂）地鎮祭」というタイトルになっておりますけれども、実はこれは、私がビルマ3年の留学僧生活の後、相当経ってから、1986年にたまたま大谷大学の学生さんがミャンマーのナツ信仰という民間信仰を研究論文にしたいということだったものですから、その学生さんを一緒に連れてナツの遺跡等を案内して回つてという機会だったわけでございます。たまたまその時は、私がお世話になっておりました、ウェーブツラという日本の九州、門司のパゴダに滞在なさつて、私達にパーリ語や南方仏教のことを教えてくださいました先生のところへ厄介になっていた時でございます。

長老さんが、「ちょっと今日は外へ出るからな。お前達、好きなようにしたらいいんだよ」と言ったのですけれども、「先生、どこへ行くんですか？」とお尋ねしたら、「いや、ちょっとな、仕事と言うか、人から頼まれたことがあつて出なくてはいけない。」とおっしゃいました。「それは何ですか？」と言つたら、地鎮祭というのが近くで行われるということでした。それで、学生と一緒にその場所に「では、先生、私たちも行ってよろしいですか？」ということでも許可を得まして、それでメモを取つてあつたのが、実は京都光華女子大学の非常勤講師をしていた時でございます。当時、私はその大学の真宗文化研究所の研究員でしたので、研究所が出していた雑誌に私がメモを手短にまとめた論文を発表させていただきました（「ミャンマーにおける最近の仏教儀礼：地鎮祭とパターン祭」『真宗文化：真宗文化研究所年報』10, 2001, 1-42頁）。ですので、私が今日、ここで申しますことは全てそこに書いてございます。それ以上のものではありません。ただ、私は上手に説明できるかどうか分かりませんが、少しでも私の感じたことを含めて、皆さんにご紹介させていただきます。

シュエダゴン・パゴダというのは、ミャンマーであまりにも有名なパゴダでございます。なぜ有名なのかと言うと、その規模が大きいことです。基台まではちょっと丘になっておまして、150段くらいは段を登つていかななくてはなりませんし、その上に99mとか、或いは96mとか言うほどの高さの大パゴダでございます。

これはミャンマーの人の誇りなのです。ビルマ人は一番先に仏教徒になつたということ誇りたいということがありありと感ぜられることを彼らは言うのです。ですから、彼らのアイデンティティとして、シュエダゴン・パゴダがあるように思っている人が非常に多い。仏・法・僧の三宝に私達は先ず皈依をして仏教徒となるわけでございますけれども、三宝のうちの僧のまだできていない時に、彼らの祖先が仏教徒になつたということ彼らは非常な誇りとしています。周りにはタイやスリランカという仏教国もあるわけですが、『律蔵大品』の中に、たまたまインドへミャンマー方面から行つた二人の商人、タブツサとバツリカが、まだ僧が生まれないうちに、仏と法の二宝に皈依したという、そこまでの話は出て来るのですけれども、それは実はミャンマーの商人だ

と言うのです。商人がそこまで足を運んでいっている時に、梵天の知らせで、今ブッダが悟りを開いたから行ってお参りしなさいというふうに言って、伝えてくれたと。それでタブッサとバツリカという二人が早速行きて、そこで帰依をしたということが『律蔵大品』の中にもきちっと載っているわけでございます。それを彼らは最も誇りとしているということがあります。

もう1枚、今日シュエダゴン・パゴダの略史年表というのを付けておきました。ミャンマーのパゴダには皆、歴史由来を述べて記した「タマイン」というものが残っております。そのタマイン、由来記と言ってもいいと思いますけれども、そういうものがありまして、そういう伝承がかなり早い時期に生まれているわけでございます。

5世紀までのところ、これは主に伝承なわけで、歴史的な証拠となるものがあるわけではございません。ただ、タブッサとバツリカが二宝に帰依したという記録だけは仏典にあるということです。しかし、そこにはその時にブッダから記念になる仏髪をいただいて帰ってきたというふうに伝えられて、その8筋の仏の髪の毛を祀ったのが、このシュエダゴン・パゴダの始まりであるというふうに言うわけでございます。

実際に、文献のかなり信頼できそうな伝説が載っているのが、5世紀から7世紀の間のものでございますが、それは時間の関係もありますので省略させていただきます。そのシュエダゴン・パゴダの中には過去三仏、すなわち、カクサンダ（俱留孫）、カナカムニ（拘那含牟尼）、カーシャパ（迦葉）と、その聖遺物まで祀られているというふうにはビルマの人達は信じているわけでございます。1436年にシンソーブー女王が90.6mの高さまで増築しましたが、この頃になると歴史資料としてもかなりはっきりしたものが出てまいります。

その後、イギリスの植民地となりましてからのことで、少し歴史的なことを書いてあるものも結構ございますが、一番最後の行の1929年には77年ぶりに英国軍がパゴダから撤退したということが書いてあります。それまでしばらく英国の軍隊が駐留していた場所でもあったわけです。

その用紙（シュエダゴン・パゴダの略史年表）につきましては、それだけにさせていただきますまして、またレジュメのところに戻ります。

たまたま行っておりました時に、地鎮祭が行われるということで行きましたのが写真1のところですよ。シュエダゴン・パゴダのアシェベと言いまして、東門のところウエープツラ長老さんのお寺があったのですけれども、それも日本人が寄進した寺院ということで、麗々とした門標みたいなものまであります。その近くに宗教裁判所がございまして、その横が広く空き地になっておりました。そのところが地鎮祭を行う場所でございます。

写真のように、もう何も無くなっていました。前には何か建物が建っていたのだと思います。その次、そこで地鎮祭をやるということで待っていたというのが、写真2のところですよ。ミンガラー・ゼージョという、市場の商人達がダマヨン（説法堂場）をつくらうということになったわけでございます。この近くにありました宗教裁判所の書記をしていた人の言った言葉がきっかけとなって、よし、それでは建てようということにな

ったということです。実はその後で、そのミンガラー市場の商人達のところへ、そのミンガラー・ゼージョを私が訪ねて行ったら、シュエダゴン・パゴダからかなり離れたところの市場の商人達だったのです。これが4マイルほど離れたところのミンガラー・ゼージョです（「ヤンゴン市街地地図」参照）。ここの商人ということです。

それでは、その次（写真3, 写真4）。これはその中にたくさんの商店が、もう隣の境がわからないぐらい、小売商も入っていれば、卸商も入っているような市場でした。

5階建てだったと思いますけども、5階のところまで上がったところに、こういう建築模型までできていたのを知ったのは、1年後にこういうものがつくられていたということがわかって、それを写真に撮っておいたものです（写真5）。

そして最初、1999年に行った時に、もう数カ月後にできていたんだと思いますけど、こういうビルマ語でダマヨンドーギーとしてあるんですけども、説法堂をここに建てますよという宣伝です。これがその場所です（写真6）。

そこで写真7.1のところ、いよいよ長老さん達が集まってきていて、実際に地鎮祭の第一段階であることをやり始めるというところがこの場面でございます。この3人並んでおります、真ん中のウェーブツラ長老が日本に36年ほど滞在して、まだお帰りになる1年ぐらい前だったか、世界各地から5人ほどビルマ政府が呼んで表彰したことがあるんですけども、ウェーブツラ長老はやはり日本へ来て30何年も布教したということの功績で大変有名になって、マハーバダンタ（Mahābhādanta, 大徳）という称号までいただいた、日本に非常に馴染み深い方で、ここでご存じの方もいらっしゃるかと思います。

そこでカンマワーチャーを唱えて、それでその土地を浄化するというところもあるんですけども、律蔵の仏典に基づいて羯磨を唱え、ここにあった古いシーマーを取り除くという儀式が執り行われました。それがこの場面でございます（写真7.2）。その内容につきましては私、カンマの、今、たまたま私が旅行をした時に買ってきていた羯磨（写真「儀式の際、誦唱される「羯磨（カンマ）」」）がございまして、きれいなものですし、これはティピタカダラと言って、三蔵を全て暗記していた、1954年から結集が始まったはずでございますけども、その1年前に試験に合格して三蔵憶持者という称号を得られた、ミングンにいらっしゃったビシッタサーラという長老さんでございまして、その人の作った羯磨であるということで、こういうものを今もヤンゴンの町の中に売っているわけです。シュエダゴン・パゴダの売店で買って来たものです。今も購入できると思います。仏典のパーリ語をそのまま写したただけのものですけども、こうやって仏教、羯磨も売られております。

その内容はそこに書いてありますので、こうして、こういう儀式をやって、これもその場面、同じ事でございます。敷き延べられたアンペラに先ず長老さん達が集まっているところです（写真7.3）。

これもそうです（写真7.4）。花と、前にポップコーン、或いは炒米なんかを入れてありまして、それのところ羯磨を唱えるということになります。これはその準備を整えて、長老さん達が集まってきて座ったところを写しただけです。

これもそうです（写真8.1-2）。蹲踞の姿勢で「羯磨文」を唱えている長老方として

ありますけれども、これは、そういう屈んで座る座り方を蹲踞と言って、ビルマの人達の羯磨を読む時の正式な座り方です。沙弥式や比丘式などを行う時もこういう座り方をして唱えたりします。それから、これもその前後の写真です（写真8.3）。これも蹲踞の姿勢でと書いてありますが、これは座っていらっしゃるところですので、尊敬を示しているところです。

そうして、それが済みまして、長老さん達は皆、宗教裁判所のところへお戻りになった後、先ほどの平服の在宅信者の方がポップコーン、或いは炒豆のようなものをばら撒いて、この土地を清浄化します（写真9）。

これ（写真10.1-2）は早速、長老さん達ご苦労様でしたということで、食事を先ず午前中にとらないと長老さん達は非時食になってしまいますので、食事を食べられなくなる。午後は食べられませんから、早速そのお食事の供養をしています。これも同じようなことです。

そうして食事の後、法施をするのです。法施の後、この説法堂を建てるためにお金を集め、そのお金を実際、寄付金として差し上げます（写真11）。この中の白い包みは目録のようなものでございます。それを差し上げているところですが、これは長老様に差し上げるのではないのです。サンガに差し上げるのではなくて、この時の建築委員長に差し上げるという形をとっております。そこら辺が、また日本の仏教のやり方と少し違う面がございます。

例えば仏教会館を建てる、説法堂を建てると言っても、お坊さんが日本では主役になって建てて、お坊さんに寄付金を差し上げるという形ですが、ビルマの場合は、こういうふういきちんと委員会ができて、ゴウパカと言います。パゴダもそうですけれども、パゴダも僧侶のものではありません。パゴダは大衆に公開されたものなのです。ですから、ゴウパカが管理するのです。管理委員会がちゃんと組織されていて、その人達が一生懸命世話をしていくと。この場合も、この人達が建てるのも、もう全部、ちゃんと最初に挙げてありました委員の人達がそれぞれ分かれて責任を持ってやるというふうになっております。

次（写真12.1）。これは実は先ず長老さんがアヌモーダナ（随喜）という説法をなさるんですけれども、こうした説法堂を建てるというような、良いことをやったことを皆さんに確認し、このことは素晴らしいことだということを褒め称える、そういうアヌモーダナというお説教をなさいます。そしてその時に、同時にイエゼッチャーという滴水作法をやったりしておりますけれども、それもやるということで、また後で、この次に出て来ると思いますが、水を垂らすということをやります。

これ（写真12.2）が滴水作法でして、銀の器などに垂らしていくわけです。それで、それを垂らすために、コップみたいなもので簡単にやる場合もありますけれども、こういうふうに、正式にそのための容器までできていて、その容器を使って水を垂らしている人です。これがどういう意味を持っているのかと言いますと、自分達の積んだ功德をあらゆる人達に分け与える。自分の死んだ親族で、まだ迷っていらっしゃる人達のところまで、或いはあらゆる生き物にまで私達の積んだ功德が及んでいきますようにとい

うようなことをやるわけです。

その間に唱えている説法がアヌモーダナと呼ばれるものでございます。この中にはこの人達の名前が入り込んだり、入れて説法をしたり、例えばパーナーティパータベラマニー（不殺生戒）というようなわかりやすいパーリ語をその中に折り込みながら説法をするのです。その時にイエゼツチャー、代表者の何人かが水を垂らすということをする。なかなか良いものですね。見ていても、気持ちの良いものです。

それも終わりました、最後にお布施を長老さん達に差し上げている場面でございます（写真13.1）。この人が先ほどのウェーブッラ長老さんです（写真13.2）。ウェーブッラ長老さんがご苦労さまでしたということで、他の人達と労を労う話をしてくださっています。

これが、次の年に私が行った時にほぼでき上がっていたという大説法堂です（写真14）。一番最初にお見せしました、平地の粗地のところにこういうものができ上がっていましたということです。

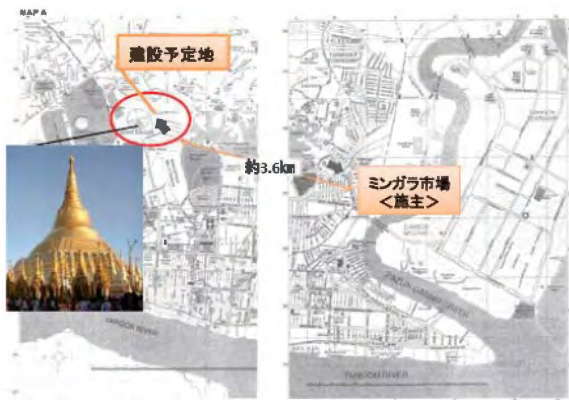
さて、それでヤンゴンも、皆さんご存じのように軍政が退いて、民主化されていっておりますけれども、都市化も同時に始まっておりまして、こういうふうに変ってきています（写真15）。釈尊のおっしゃったとおり、全ては移り変わりをしていくものだということでございます。どうも大変不十分なお話しかできませんでしたが、どうぞまた時間がございましたら、私が言えなかったことについては、論文の方を読んでいただければ有り難いなというふうに思います。どうもありがとうございました。



写真1. ダマヨン建設予定地、建物は州選僧伽総監長老会ヤンゴン高等裁判所



写真2. ダマヨン建設予定地、チャートーヤ通りに向かって。



ヤンゴン市街地地図



写真3. 施主たちの「ミンガラ市場」ビル[5階建て]



写真4. ミンガラ市場内部の布生地店舗、最上部に仏壇(各店舗毎に)がある。



写真5. ミンガラ市場事務所横に陳列されていた新「大説法堂」建築模型



写真6. 新「大説法堂」建築予定地であることを示す看板  
[1998年3月撮影]



写真7.1 地鎮祭のため各四方の一隅に敷きのべられたアンペラござに座った長老がたと花、大きな銀製の容器には炒り米が入られている。



写真7.2 地鎮祭のため各四方の一隅に敷きのべられたアンペラござに座った長老がたと花、大きな銀製の容器には炒り米が入られている。

儀式の際、誦唱される「羯磨(カンマ)」



第1葉

貝葉形の紙に印刷されたもの (5.0×48.5cm)



写真7.3 地鎮祭のため各四方の一隅に敷きのべられたアンペラござに座った長老がたと花、大きな銀製の容器には炒り米が入られている。



写真7.4 地鎮祭のため各四方の一隅に敷きのべられたアンペラござに座った長老と花、大きな銀製の容器には炒り米が入られている。





写真8.1 蹲踞の姿勢で「羯磨文」を唱えている長老方と見守る施主の一群。



写真8.2 蹲踞の姿勢で「羯磨文」を唱えている長老方と見守る施主の一群。



写真8.3 蹲踞の姿勢で「羯磨文」を唱えている長老方と見守る施主の一群。



写真9. 羯磨文誦唱後に施主が建築予定地に「ポウポウlaja」をふりまく。



写真10.1 施主たちから地鎮祭執行の長老がたへ食事供養がなされる。



写真10.2 施主たちから地鎮祭執行の長老がたへ食事供養がなされる。



写真11. 長老僧がたの面前で大説法堂建設資金が目録[箱に金額明記]の形でダマヨシ建造寄進委員会会長U. Koko氏へ手渡される。



写真12.1 長老代表者の先唱してくれる「アヌモーダナ(祝福)の言葉」を皆で復唱しながら「イエゼツチャー(滴水供養)」が行われる。



写真12.2 長老代表者の先唱してくれる「アヌモーダナ(祝福)の言葉」を皆で復唱しながら「イエゼツチャー(滴水供養)」が行われる。



写真13.1 施主や信者たちから地鎮祭執行の長老がたへお礼の布施供養がなされる。



写真13.2 地鎮祭が終わり互いに労う長老がたの様子  
右側: ウェーブツラ長老(福岡・門司「世界平和バゴダ」にて約30年間通された。)



写真14. 完成間近い「ミンガラーゼディ大説法堂」  
(1999年12月撮影)



写真15. ヤンゴンの都市化

## 添付資料

シュエダゴン・パゴダ東門地区のダマヨンドージー (大説法堂) 地鎮祭 (レジメ)

日本ミャンマー友好協会 池田正隆

### 1. ダマヨンジ (大説法堂) 建設の機運・予定

日時 1998年3月20日 ミンガラゼディ・ダマヨンドージー (大説法堂) 地鎮祭

場所 シュエダゴン・パゴダ東門前 - パハントウンシップ・ミョウマ地区 写真 (1・2)

もとウー・ウェーブッラ長老僧院 (Bhadanta Vepulla Aggamaha Pandita-

Mahasasanavepulla Monastery) の近隣地

州選サンガ総監長老会ヤンゴン高等宗教裁判所 THAING-Sangha-nayaka-Apwe

Yangon High Law Court 横庭広場 (チャートーヤ通りに面しており、シュエダゴンパゴダ東参道まで約10数メートルほどのところ)

### 2. 企画者となった施主

ミンガラ・ゼージョ (市場) 商人たち (ヤンゴンでも有数の著名な市場、シュエダゴン・パゴダの東方カンドージー湖近辺) (写真3・4、マップ参照)

建造寄進事務局 1997年10月結成

①顧問委員 19名 ②実行委員 15名 ③建築委員 15名 ④寄付集金委員 50名

⑤会計委員 3名 ⑥監査委員 3名 ⑦広報委員 4名

なお①のナーヤカアポエの19人は年配者で顧問役、実動するのは、あくまで②、③、④、

⑤、⑥、⑦の各委員で、このミンガラ市場で店を構えている商人たち。

写真5. は「大説法堂」建築模型 写真6. は建築予定地の路上に示された看板。

### 3. ダマヨンジ (説法堂) 建設のための地鎮祭儀礼

— 一律蔵・小品による「旧結界除去作法」にしたがって実施 —

#### (1) カンマワーチャー (Kammavāca) 羯磨文の誦唱

p.7 下段に示された図は、大説法堂建設予定地の空き地で比丘長老僧の数(2~4)名ずつが地鎮祭儀礼のため竹ござ製敷物上に集合した場所 (4箇所) を示す (写真7. 参照)

なお、羯磨文 Kammavāca 誦唱の時には、必ず蹲踞 (そんきよ) の姿勢をとり、手にした羯磨文を自身の眼前に持ち上げ、実際に見ながら唱えなければならない規定になっているので、長老比丘の姿勢に注意すること。(写真7と8参照)

そのとき唱えられた羯磨文— (a) 「離れて住むことのできる旧結界除去作法」パーリ語原文 p.9 下段に提示、その日本語訳 p.10 参照。

(b) 「共住することの出来る旧結界除去作法」パーリ語原文 p.10 日本語訳、同 p.10~11

なお、この儀礼は、サンガによる「白四羯磨」とは異なり、いずれも「白二羯磨」である。

## (2) ダマヨン敷地境内へポウポウ(lājā,炒り米)を撒く

### ダマヨンジー (大説法堂) 予定境界の清浄化

長老比丘がたの羯磨儀礼を済ませて去った後まもなく、信徒の一人が代表して平服姿のまま、長老僧の座っていた竹ござ上の花と共に飾られていた大きな容器(その中には、炒りトウモロコシのポップコーン、あるいは炒り米、ないし炒り豆など(ビルマ語ポウポウ、パーリ語 lājā) が入れられていた) 手にとっては、境内となる敷地内を順繰りに歩き回り、容器中のポウポウを地面にバラバラ撒き散らしてまわっていた。(写真 9.参照)

それは、長老僧方が羯磨文を唱えたことにより仏徳の威力が銀製容器中などの炒り米やポップコーンに加わり、聖なる品となって浄化の働きをなすとみなされているからである。

その聖なる品は、邪悪なヤッカ(夜叉・悪鬼) やクンバンダ(壺形夜叉) ナーガ(龍・毒蛇)などを駆逐する力を持っているので、それらが境界内に入りこめないようにするためであるとされる。

## 4. 在家信者(施主たち)の積徳行為儀礼

### 比丘・長老僧への食事供養 (写真 10 参照)

会場 宗教裁判所会館二階広間にて

目的 福田なるサンガ(僧伽)に功德を積ませていただくための行為。すなわち南方仏教諸国の善行として認められている慣習。このことは、以下のように5つの利益があるとされて、食物を施す人は、他人に5つの利益を与える。したがって自分も同様に利益を得ることができると信じて疑わないのである。

- ①寿命が長く[長寿]②顔が美しく[美貌]③安らかで楽しく[安楽]④体に力がつき[体力]
- ⑤物事を筋道を立てて考え、正しい判断をくだし、冷静に事を運ぶ能力をもつ[理知]

## 5. 在家信者である施主たちの三帰依、五戒懇請 (p.14~16)

### ①ブッダへの敬礼

### ②仏・法・僧 三宝への帰依

### ③五戒授与 不殺生戒 不偷盗戒 不邪淫戒 不妄語戒 不飲酒戒

なお、このときは五戒懇請・授与であったが、在家布薩日(ビルマ暦の8日、15日、23日、晦日)には、八戒あるいは九戒の授与を懇請し授与されて厳守しつつ当日を過ごす信者も多い。(拙著など参照)

## 6. 施主たちからの寄付金贈呈

続いて司会者が、寄進行為を宣言し、サンガの比丘長老の面前で、寄付金額を明確に表示した箱（日本では目録に相当）を贈る（p.16 写真 11 参照）儀式がなされた。

施主であるミンガラー市場の各階の代表 4 名が出てきて、建造を促進する建築委員会の会長（ウー・コーコー氏）に差し出され、受納された。それを比丘僧伽に寄進するかのように考えられそうであるが、そうではない。ビルマでは、ダマヨン（説法堂）もパゴダもサンガの所有物ではなく、僧院以外の宗教建造物は、出家者のものではない。あくまで「在家信者の代表で構成される委員会」が管理することになっているのである。

したがって、ダマヨン完成後の運営についてまで責任を負うことになるのである。1999年3月、私のミンガラ市場訪問時に見せていただいた「建造寄進趣意書」には、明確に「ダマヨン(説法堂)を建造して仏教繁栄のために寄与したい」ということがその目的であると記されていた。当時はダマヨン建築の最低予定金額 3000 万チャットとのことであった。

## 7. 比丘・長老僧からの法施

### (1) 誦経 ——パリッタ Paritta (護呪経) の誦唱

メッタ・スッタ Metta Sutta (パーリ語による誦唱) p.7 下段 2行目～p.18-19

日本語訳 p.19-20-21

### (2) 説法 内容は、①仏・法・僧の徳を賛嘆、②説法堂建設の意義と仏法興隆のために尽力することによって積まれる功德の大きなこと、③地鎮祭でとなえられたカンマワ一チャー羯磨文についての説明がなされた。

## 8. 回向儀礼——イエゼツチャー

### (1) アヌモーダナ(Anumodana 随喜・祝福の意)

長老比丘の一人が代表して、ビルマ語・パーリ語混交の「アヌモーダナ(祝福の言葉)」を朗々と唱えあげて下さり、それを参会者一同が復唱する。その中にはミンガラー市場の施主の名前が織り込まれており、当日の供養や彼らの祈願と五戒を守ることの意義、および経文誦唱の功德をほめたたえ、積んだ功德をあらゆる有情に回向し分け与えることを宣言する。

### (2) イエゼツチャー (滴水作法) (写真 12. 参照)

こうして寄進行為により積まれた功德は、自分たちのみで享受するのではなく、すべての縁ある有情すなわち、人間を含むすべての生物に回向する。それがビルマ仏教徒の常習であり、伝統であった。

集まった在家の施主一同は、その説法を味わいつつ、長老比丘の言葉の後に続いて1節ずつ復唱していく。

施主たちの代表数名は、それを復唱して唱えながら、銀製のお盆型の容器などに、手に持ったコップや水入れの水を少量ずつ垂らしていく「イエゼツチャー（滴水供養）」の作法を同時におこなう。（p.22 写真 12.参照）

「アヌモーダナ」の復唱が終わり、イエゼツチャーの滴水作法も終了する。終了すると即座に、その場の在家信者一同はいっせいに、大声をあげて、「サードゥ、サードゥ」（*sādhu, sādhu*, 善い哉、善い哉、の意）と唱和する。

なお、イエゼツチャーで滴水された水は、儀礼終了後に施主である信者によって戸外に持ち出され、近所の草木などに、そっとかけてやる。それは供養したことによって積まれた功德を、亡き三界輪廻の縁者にまで配り、分け与える回向の行為とされているからだという。

#### 9. 比丘、長老僧へのお布施（写真 13. 参照）

最後に施主や信者から招かれて出席した長老、比丘一人ずつ全員にお布施が捧げられた。（p.22 写真13）

#### 参考資料

平木光二「シュエダゴン仏塔における仏教儀礼の一形態」パーリ学仏教文化学7号（1994年）

原田正美「ミャンマー—アビダンマ学習にみる統制下の伝統と信仰」木村文輝編『挑戦する仏教—アジア各国における歴史といま』所収（2010年）法蔵館

蔵本龍介「僧院は誰のものか—ミャンマー上座仏教における財の所有—」パーリ学仏教文化学24号（2010年）

池田正隆「ビルマの Shewedagon Pagoda Tamainig について」印度学仏教学研究18-2（1971年）「再びシュエダゴン・パゴダ縁起について」印度学仏教学研究19-2（1972年）

## 西暦 | ビルマ族 | モン族 | インド

BC832年 ビルマの先住民族ピュー族の城砦が南詔の攻撃により滅亡した以降にビルマ族がエーヤーワディ平原に進出した。ビルマ族の祖先たちは、南詔の迫害を逃れ、ナッティ峠からモン族の居住地であるチョウセイ地方に攻め入り占拠した。タイエーキッタヤー、ペイタノー、ハリンジーなどのピュー族遺跡、タトーンヤケーラータなどのモン族遺跡、アラカン地方のウェータリ一遺跡の存在や出土品から、ビルマでも10世紀以前にいくつかの民族文化があったことは知られるが、その中にビルマ族の存在が確実視されるのは、バガン朝(11世紀～)以降と言われる。

BC3世紀 アショーカ王(在位BC268～232年頃)仏舎利塔建造供養、および第三回仏典結集後に9地方に多数の開教使を派遣したことは、6世紀のスリランカのパーリ語史書『マハーヴァンサ(大史)』にも伝えられているが、ビルマの仏教史書『サーサナヴァンサ』は、その際にソーナとウッタラという二人の長老が派遣されたスワンナプーミ(金地国)とは、シットタンとサルウィン両河の下流域モン族王国ラーマンニャデーサであるとして、これを第1次の仏教確立であるとしている。

AD5世紀頃 ブッダゴーサ(仏音)などによるパーリ語仏典注釈書(アツカターなど)成立の頃になり、初めて釈尊のタブッサ・パツリカへの頭髪授与の伝承が登場してくる。

パーリ語仏典『律蔵大品』中に、「タブッサ Taapussa とパツリカ Ballika という二人の商人がウッカラ(Ukkala>Utkaala・インドのオリッサ地方)より旅の途中で天神の勧めで、「ラージャヤタナ樹の下に禪定に入られていたブッダへ食事供養をしてブッダ(仏)と覺られた教え(法)との二宝へ帰依した最初の在家信者となった」という記述がある。そのことが、シュエダゴン・パゴダ建立の由来(縁起談)「タマイン」で、さらにその際に両商人が、ブッダより8筋の頭髪を拝受したとされるのである。だが、パーリ語三蔵經典中には、その仏髪拝受の記述までは記されていない。しかし、ミャンマー仏教徒は、古来からその伝承を固く信じ、仏教初伝という自族のアイデンティティを誇示している。

AD5世紀～7世紀 ビルマの学者ティン・フラ・トウは、仏塔の建築様式から、シュエダゴン・パゴダの原型成立は5世紀頃までには建立されていたと推論している。

パゴダ建立のティンゴウタヤの丘はブッダ以前に悟りを得た過去三仏の遺品である拘留孫仏の籬杖、拘那含仏の氷蓮し、迦葉仏の浴衣が祀られていた聖なる土地でもあり、かくてブッダの聖髪が祀られるに至ったと伝えられ、王朝時代には、多くの王が、布施行として、パゴダ増築や装飾に尽力したことを伝える。

AD1353-85年 在位のピンニャーウー王は、シュエダゴン・パゴダの高さを約19mの高さ改築したが、その後地震で壊れ、シンソーブー女王が1436年に再建し、90.6mの高さまでに増築、1610年には、人々の協力で金張りにしたと伝えられる。

AD1824年 5月12日 英国軍がパゴダ境内を占領、1826年12月に一旦返却されたが、1852年4月再度パゴダおよびその境内が占領された。

AD1920年 には、ラングーン大学の学生によるストライキで、パゴダ境内でキャンプがはられた。

AD1929年 77年ぶりに英国軍がパゴダ境内から撤退し1930年遂に西階段がビルマ民衆に開放された。